へ14
4410
1

山田孝
子たり
欠ケ二巻
伯爵
至孝

へ14
4410
1-2

へ14 4410 1 特

（二）空想の立に理を附け
八の理概と言ふ

告の出て
思ふ
立
知らず只獨
所
妙齢者
妙齢の美婦
所の妙齢の美婦人の
真先に見
思ふ回して
思ふ結の
牡丹簪の獅子吾
嘸見
考
鶯茶樣の聲の美
嘸見
考

帝國圖書館藏

底髮を前下で、ち道の両側に苔のつで、いとう眼く障間で、竹縁で、そんみつる考る。

抜衣紋

詰の髪も鬼、薄い毛も讀む。

、縮れ毛も想像する。

乱髪のくく、百面相の所

辺目の中座敷中（浮出て、個性様の表

井水の節孔は吾れ面を見て、天

。

覽ることゝなるまで

埋

ゝ。

「ゝて、しる。

今日ゝ知ゝ

薬鈴ゝ。

「嘘吐！　鈴の音だのすりこぎだのと。
「冗談じゃない！　程度を聞く。
「可いとも。　鈴の音のよう乃らしい。
「可いとも。
「たしかだわ。」
「ゆうべの寝坊だって。
「鶯だ。　しっかりなさい。
「好きだ。　あんなに美味い

[illegible]、唯[illegible]の[illegible]から[illegible]の[illegible]が[illegible]から[illegible]浮き出てのて隨て唯[illegible]の粘[illegible]の[illegible]文[illegible]の[illegible]は儀[illegible]聞[illegible]の[illegible]旨[illegible]。」

「知[illegible]は儀[illegible]聞[illegible]。」

澤庵「儀[illegible]聞[illegible]。」

「乾[illegible]。」

「[illegible]。」

「乾[illegible]風邪[illegible]引[illegible]。」

「[illegible]。」

途端鈴の音がする。

「[illegible]、そらしと[illegible]。」

「[illegible]、そらって、[illegible]。」

「[illegible]ね。[illegible]と[illegible]坊[illegible]て[illegible]人の鈴の[illegible]、[illegible]の[illegible]。」

鈴「[illegible]。」

鈴「見て[illegible]知[illegible]。」

「いるさと。」

「[illegible]。私取[illegible]。」

特に仕えず「ゆんべ」トスルコト

「はいは、得[illegible]の逆襲の。[illegible]、そんな事はいはれんこと[illegible]。[illegible]、いってはいかんよ。」

「私は鈴の見[illegible]こと。新聞の聞こえたけれども、鈴の音をこともやめて、蟹餅を見[illegible]為ったの。」

「[illegible]、[illegible]言ってたよ。早く行こうと、新聞の渥[illegible]。」

「渥[illegible]好[illegible]。渥[illegible]。」

「[illegible]。」

逆襲続ぶ。

「[illegible]。[illegible]、[illegible]事[illegible]。[illegible]、[illegible]事[illegible]。」

「可いったら！　[illegible]早く見[illegible]。[illegible]取[illegible]。」

「[illegible]見[illegible]。」

論[illegible]。

「うーん、一度の法華経」
「唐土の？」
「いや、」
「見るのよ。」「何の法華経？」
「うん、あれ？　法華経は、その、あれ
「ほれ行ってのお告げ。」「うーん……」
「髪脱いで行ってのお告げ。」「法華経？　まア、
「酒落な兄さんね。」「リスリン剤？」
「リスリン？　何？」「粉？」
「それも紅？」
「紅？」「ほらてよ。」「うーん……」

「暑品」「附」
「持参金」「附」
「何の言」「うーん……」
「ごきゅっと寄る。」
「古」「賣品」「多」
「蠻人社會」「田舎」
「隨分晴れ方」「ゆ」「田舎」
「代」「やっ、」「結納」
「そ、」「言」
「言」「言」
あ、

よ、冷たい、起て行いよ。」

ちらと窓外を眺める。

い海の起伏。

い玄関、さア蜻蛉の帰り。

新報日報室鐵砲　野鐵砲　紙鐵

砲、是、吹く。

ら、凄い　立て戻る通り。

枝撫切れでん　豆の隔　丁場は長つが、

新聞

（七）ゴケ

仰ぐ三毛、行ず、班、

芸に本天鵞絨を吹ぐ三毛

頗る思。

先刻　一所懸命見てるのね、

は。　かしら。　私の一所懸命見て見

直他の新聞を見る。

「し　一所懸命見ちゃ厭ないや。」

「ちゃまを言ってて、明けを

でよう知らるわよ。」　「一所で動

「動いて行くと二行は一度に目へ
は映らうと。」
「行くと二行讀んでも、一つの動
きを見るやうなもの。」
「その時は目の考へ」
「あゝ可笑しい。何を考へて。」
「成程まゝ伸びるこうして魔な
何方へ伸びるのと。」
「まゝ百合、目の伸びるって。蜻蛉の端午
見るわ。」

「馬鹿言へ。蜻蛉の端午の目なんか伸び
目なんかあるもの。」
「伸びる目がそんなに伸びて。」
「ぶらぶらして。」
「ぶつぶつです。」と躍起となって突撃して、
喧嘩で綾の氣
なって。
「ぶつぶつ。」
「果てしない果。」
「待て。」
「それ、ぶつぶつ。」

「何ですの。」

「草木の芽よ。」

偖こそ美事勝ると云はれるの。些と口惜しい。

「憎らしい。やっぱり事でなくてはならぬのよ。一所懸命精一杯で、草木の芽ばかり。」

「馬鹿言ふな。まるで有ないと！」

「ふうん」と言ひ捨て、「嘘よ、そうよ。嘘ちがうよ。」

「嘘ちがうんこそ。」

仲の子は『メ』ばかり——仲の

じゃ『メ』は、そんなに『あめ（飴）』が欲しい、極

「見ろ。偉ってる。」

「程こそ思ふの。」

「疲れ倦慢でしょうそうな。」

「苦くって、どうしてもそうよ。可哀そうね、

種切れて。」

「馬鹿言ふな、ちがうの、

こうよ、そうそ。仲の子は『メ』は

連『メ』でし。」

「憎らしいの。」

縄の『しメ』

連春子ね。

ちがうてし

と言葉を脱ぎ捨てた。

「大変だ。伸子の『メ』か。伸子の『メ』に、それ、病人の『つメ（爪）』だらう。」

「ゆつくりね。よく考へて。」

「無くてさ。伸子の『メ』か。伸子の『ヒ』は、それ、掻取るといふ『そきメ（取極）』だ。」

「若くつて。もつと伸子の人生の、もつと思ひ切つて、今度は（遠慮の）遠慮の、面白いの、

伸子の『メ』は、それ、紺屋の明後日の『ヒ』メ（深）』だ。

『もメ（掻）』、是は長伸子。

『メ（豆）』、是は伸子。

だれ、この世の『かてメ（固）』に金の『あつメ（集）』に、勤の『つとメ（勤）』に、是等

「てる伸子んだよ。」

「澤山好き塩梅に口で、

て、肝心の胡麻の續を伸子。何

はこの通り。

やはり損

強情同士の

夢の出『ま

面倒一緒

「それにしてもメつ駄目」と思ひ出す。市伸ばす。」

新聞の廣告を見てゐた。

「いやらしいのばかりだ。」

「ふんとに。」

「つまらない。」

つく〳〵差寄せた。

神の、とてもの差寄せ。

現在の兄そのくせ拘泥の味しかない。

「はいはいね。」

求婚の字の用ひ方。

「とつとと」

「拝見ね」と後知らずの異言

で、同時に新聞引ッ奪る。

「當り是」

「何」と詔つた。

「字に返事する。」

「餘稽は」

「慍」

「返事する」

「何」

「注」

「逢は言ふ」

「いや待て」

「岸」

「撥き立て」

「鋭い」

「悪狡い」

「怪しく言葉と

みつめた。

そこへ行くと、好くてはしとやかなのは私方の宮子だわ。

蔑視した顔。

「お婚廣告を見て、胸とそして、

ひょっとすると遠い無いと、いいもしつこいなと

手紙を、

「憲」

「憲」

「憲」

出度いと思ふ。

「偉くなる、しるし。全く。」

ひとり言を通して出版屋広告なんて、こんな怪しい物は無しとしてゐる。

「出てゐる餘程間抜けだ」

つくづく、ちらつと。

「可笑しい、ちらつと。」

てゐる、ちらつと。

のみ。

程試驗見様なる事

80

為しつけれど、よく考へる人の慰藉方。

見置き差し無し。

つけれど、女の方で様子の生活

いう何為に取慰

ない。

応募者の振

ない。

掛

ない。

程言顔

書いてあることの知

見様

業務日誌

見て苑

「四五年、否、驚きましたわ」と、兄の顔をつくづく眺めて、「どこんなに変りましたの、」

「さあ、何さまるのかあ」と、そ知らぬ顔。

「たゞ一つ、財産ばかりは、ねえ兄さん、お嬢さまの為にとて、四五年前、中々渡らぬ。わたしと、中々渡らぬ。」

置けば。

かゝるのは續けて、「歳へ千二百。

歳へ千二百。歳へ千二百。

こと！ 歳へ千二百。

わ。

る所とは千二百とは罪ですわ。

る奴、この奴は。

好る奴ばかりつゝて、

つくん、つくんと、

つるのかしらね。

今日こそ、

ら、どうも思議。

それで歳へ千二百。

考って見ると、

業家の二十の、

太分見こん見

[illegible]

[illegible]

毎日費下、所得稼[illegible]

[illegible]る圓丸の勘定[illegible]為して、縫[illegible]

[illegible]。[illegible]

[illegible]少[illegible]累[illegible]すと。[illegible]

[illegible]

[illegible]利[illegible]

[illegible]知[illegible]すでいる。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]見[illegible]

[illegible]留守を宜[illegible]得[illegible]

[illegible]出て行[illegible]

[illegible]

[illegible]見て[illegible]情[illegible]

[illegible]

決[illegible]見[illegible]

[illegible]見[illegible]毎[illegible]

[illegible]何[illegible]

そして何の阿鼻叫喚もなく、ただ変な顔をするばかりで、知らぬ、自分で自分を評して見たいやつて美しいとは言はない、言はれるのは美しいのだ。

何の忘れられるのを、その傳記の解説を、自分で解釈してゐるのだ。

何の忘れ、いつてゐるのだ。

見ないでいつてゐるのだ。

獨言に呟く。

恩、恩に頬、恩元、恩に、やるかな

えゝ、うのだ。

誰か格子の前に人

御免

あゝ、

附額のもとに遺して

見て、泥。

つゝ、行つぐ！

と、

「ぶるぶるとして、
「私よ」
「あゝ、くらはつ
すつて直。私一人よ。」
「さうして言の聲の内にも訴は陰子の
中のくしゃみ。ちのとも圓いも顏である。卯
いふならば水魚の青て為。ほくろ
のはけつ。
「ゆらゆらとして
くゝとして
「ゆるゝ。」

「物驚ね。
「人の邊の。」
「馳走よ。深閨に孤坐するうして、ち
人と詩的過ぎる。黄昏」
「戸外の深閨わ。」
「結構。」
「ぶつぶつこの
「寸語のちがは。ちかるのゆゝしく霜
おのある。霽け晴
「始まるよ。かるのこと。可
「始まるよ。可くて、

[illegible]て、そして、説諭[illegible]。可くして、説を聞いて呉れて、そして、速らと決[illegible]。可くして、速らと決して

もゐし

「まア一度大変わ。先ずるが可い

けし、是の外の方でもって見られ、

相談料取

「結納の[illegible]と、[illegible]出て

鬼[illegible]結婚[illegible]

[illegible]出る知[illegible]。

「[illegible]極[illegible]

[illegible]可いって[illegible]。

[illegible]ね、[illegible]真面目[illegible]

[illegible]酔倒[illegible]

[illegible]に應って見る[illegible]

[illegible]

[illegible]貴女[illegible]

「嘘[illegible]、應[illegible]。[illegible]、お

[illegible]廣告[illegible]方の真面目[illegible]

[illegible]可いって[illegible]。

「そんなのでもいと何して知れてもし
「何してて、あんこり嘘見くるつ。
「ばっかるわ、月は又るる、呉行方正、立ち親考
美い、天地玄黄、宇宙洪荒、おっかるし。
「好ってるわ、よっぽどまるのみ性が。
てけれども金ばわね、まも彼様ちゃ仕ら
先ほちゃの月ちゃ、うしかねし。
「てっちゃってて、雛々さんは彼様ち庸金
で良の席へ嫁ってるの。
「寳際ちゃ見ちゃけ、「嘩ちゃ解るい

ふくても都合
御覧ちゃるる。月は百
晩、まてさ、ろ月ちゃ無くてもよ立て居ち。
よ、それの身分の方人ちゃ、いれ立
陰ちゃ分ちゃ、何ちゃ
ちゃっても、自分ちゃ知人のふりちゃ
で、仕所ちゃ細君ちゃ捜
ってて、
「てしし
「身をつっぴ。「可笑
しわね。「ちゃ
無方ちゃの知ちゃ

つゝ摘して彼様は新聞に出てゐる、皆〻皆〻の見付けの悪さうなこと、困つてゐる事は無さうなわ。」

「ろくな事書いて良家の淑女と誘惑てゝ知れるものし、隨分世間の婦人達の中、迷ひそこの、淑女の假面を被てゐるし。」

「有得る事だわ。」

「當然ね。」

「私なんぞ」

子は急に陰気極けて調子を落して、「つゝ獨で考へ込む、絶望の餘身體構ふもの、当惑の中に、廣告の出れば、辛抱して見る。」

「思ふ。」

かつての眼付きである。

「貴女は心にくい新しすぎる。」

「勿論的、私は國に居て、時許嫁の男人と、不幸逢て娼妓の「ゆめ」を、子に陶つて、

[illegible]て仕舞ひまゝ、元気で死んでゐて舞ふの。人品はよくしかし、怒ったと[illegible]と聲潜めて、「貴女の兄さんは金を」。けれど、かうした貴女のみ兄さんの限りの話しを。私の無茶苦茶にみ兄さんを今言ひ嚴の人を同様に為てゐると考へる。[illegible]考へ[illegible]。

捨て[illegible]の紋所で、[illegible]捨鉢の[illegible]見[illegible]

[illegible]。そこへ[illegible]出[illegible]人の[illegible]真[illegible]

[illegible]。

[illegible]見付け[illegible]扶桑日報の[illegible]人[illegible]

見付け[illegible]

[illegible]。

[illegible]。貴女新聞見[illegible]

[illegible]心配[illegible]

[illegible]。「隠[illegible]」

[illegible]。

[illegible]新聞

「何會社？」

「いゝえ、何でも書いてるくつてよ。」

「二十九歳で附合る殺心そ。」

「そりゃ？　ろ的？」

「いゝえ、違ふよ。」

「ろ的？」

「いゝえ、違ふよ。」

「ろ的？」

「いゝえ、違ふよ。」

「何？　何？　何？」

「書いてあるつて？」

「それで、ろ的？」

「最斷つて？」

「そう。」

「よ。」

「ひゃ！　あア、それで宣のつてわと、附は鼓動あるつもり、その後わも殺るの静。」

「れ行くつてる。」

「それ？　それで？　何でも？」

「葉調子れくかふ有て、後ろの語まが跳ぬて居る。」

「えゝ、それ？　それ？　それ？」

「それで。」

「何？　何？　何？」

「それ？　それ？　それ？」

「いゝえ、違ふよ。」

「それ？　それ？　それ？」

「いゝえ、違ふよ。」

「それ？　それ？　それ？」

「いゝえ、違ふよ。」

「何？　何？　何？」

「いゝえ、違ふよ。」

「何？　何？　何？」

「いゝえ、違ふよ。」

「何？　何？　何

かつぶりあり心。
「用の資格は何……」
「あゝ歳位の淑母よ……」
「まつ、似たるわ」
「現に、貴女？」
「何にてこと、何れ、こゝ、こゝ、こゝの
幾許か、何ったとも、恐つる廣吉
苦ねえ、ごとも蟇
淑母と言ふ其辺に決わわと」
全。
歳位の婆こんて、其

孫なのは無つぶこと
ふ。
「……」
「見る、可つ、
無く、只黙引と
見る、
丈言く、私」
冗談つよ貴女
「李富、貴女？」
押すの知

道理に落てゝ
論勧
「知ふは一先
悪く、」と、
「押て。何為に急と

「李富って何、貴女？」　冗談てくのの李富

「冗くのしよ。」　冗談仰るの李富仰

所で、そのふたりの李富の

所のと、斯ういふのよ。

「ちらしのわ、つ組んで」。

「貶して腹で寝るくの腹の中見れ

ばわし。

交情好しも女女、まは皮肉たるこの。

（九）女の多くは表と裏とを持つ

女の多くは表と裏。見遣られ

薄衣と李心。彼女ケて。ちの量

作らう美味の肉に大饗宴る衣と粧ケて、

油濃い天麩羅。

かつ子。

浪の求婚廣告。貶し

て。

庭墓打

ちのし。冗談ぶ。渦

ぶ。嘘てる。互に秘密

が無けして、そして浪に浪。

[illegible]、只[illegible]秘密である。
この[illegible]夢[illegible]現在の[illegible]、此様な奇妙な駆け
友人[illegible]の間に、今日は出張して見
引[illegible]有[illegible]とは想[illegible]。
合[illegible]試験と行[illegible]
朝[illegible]氣の[illegible]
鼻雄の内心[illegible]は最初[illegible]
廣告、即ち[illegible]扱[illegible]見合ひ
[illegible]績[illegible]
[illegible]現在見て、[illegible]

[illegible]待合[illegible]見[illegible]積
[illegible]衝突の運命[illegible]
内心[illegible]
[illegible]の廣告[illegible]
[illegible]扱[illegible]
[illegible]廣告[illegible]
[illegible]相手[illegible]思[illegible]見て、真面目鼻雄と
見[illegible]見合らしく行ッ
行[illegible]、是は衝突[illegible]
[illegible]鬼[illegible]用変[illegible]運[illegible]既[illegible]

殘る。丙子の廣告は？　是は知らぬ。

「知らぬ？　可愛ゆい。」

「かつて、くれられた。」

「据ゑ膳。」

「會ひ行く。」

「禮拜後。」

「行きます。」

「菊物。」

「貴下、今月會？　寒いね。」

「今朝。」

「私は何。」

「聲ばかり。」

「譯は。」

「ふ、ふ、ふ。」

「稍殷。」

「みんな寒くなんで。」

「ふ、ふ、ふ。」

「寒くなれば。」

「寒くて、ふるへる。」

「訝。」

「釣合ひ。」

「わ。」

「いつも、寒い過ぎて、吃驚もして、」

「それで、その彼。」

「前に、忘れてゐる。」

「誰？　然言ふ。」

「來て？」

「ん、くるのだ。」

くるぶくもの奇抜さ！　口惜しかりし。

「人は郵便の郵便。

郵便の誰か受取りて？

ここの来る所。　くるの途中でしん

會う。　黙って聞きしてて慌

さ　慌　計りて分。　分

著く　著く　著く　黙る。

黙って　聞いて。

帰って　出て。

「斯。　何か會に有ると思へば。

その會に今日　時　出席して、一

つ　つ　つ　回　つ　つ　遅

帰って来る。　真績

居って宣し

こうしてかの人。　「ア、

何か　早言　ちい。　私分　為ちい。

會ごの　迄　おで可

何所　殺　置　頂戴る。　何て會

ちの　時　の　ら　し

「アア、葬儀の、名前は所の、知る人は知らないけれども、知らないで、名前は、貴方が出席出来ないと、可笑しい。」

「知らないで、宜しいわけ。徳出席して、代りに二人出席して、何時も出席出来ないと、」

「笑ふ。」

「ゆうれい！　言ふ。」

「昨日の今朝、已に言ふの。」

「と、是も異聲隙疾ある。」

「あつ、急ぐ。」

「ゆうれい、言ふ。」

「私の言ふ。」

「流行ふ。」

「知られ、忘れ、」

「忘れる。」

「流行ふ。」

けれど、

家迄しは何れんだ。」
「家迄の時間やちくとよ、見たん。」
「ちっとも。」
通知状の来ら。見ら。」
「手紙ちい。」
「已見くるみ。」
「まっ迄。人に私が見るくのよ。」
「ものそんなものは家にんらっ。」
「家の途中で遇。」
家の途中？
ちの途中まはこのらっ。」

「家の途中てくのは、此書齋の真中なの。
ね、豊所へ玄關へ来てて、此書齋の真中の了度。途中に為るて、見て
んし。
「るくるよ、巧く言て回ら。てて、
くくのはて、
「れの友達よ。そらて、ねはおにくい
てよ。跡ちくるし。
真実分偽実分、半半
愛
實得て一つへら、ゆ
」

てるくてらとて
そう。

市へ見る。つぎ〳〵繁
これらは早く帰るこうと、早くくけんの
先ぶで、何の胡麻ぬて、菓
筒かへび、著物と出こる。浮服
思ひ和服言ふ、袴毒の思
毒ちつてい。迷ワ
てたこと、えっ、兄こん、時
てこの、さこ。浮服、和服
袴、袴の毒袴。
し

「浮服可、袴、和服、著流可、
袴、迷。兄は是
度の方で、浮服
「けんを和服の方ぶ。
「併料は方ぶ。才料の悪。
ちう流行ちる。
行ちい」
體格撮者ぶ。
「ぶちる、人に見る。
「人に見
會人に見

[illegible]

[illegible]

論色

[illegible]

「[illegible]

一人で[illegible]

[illegible]

見

[illegible]

著物と畫ド

怒

[illegible]

「[illegible]

[illegible]

詰

[illegible]

遠

[illegible]

[illegible]

行

滑稽で、私の[illegible]

[illegible]

言

回

[illegible]

[illegible]

探

聞

[illegible]

陣の圖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

「すると実弾仕方が無いから、留守の間の仕方が無いから、會費は。」

「無代の。」

「沖落てゐる。見てゐる。」

「ここは、已のもたくさん會費をらい。」

「ばかりなるのね。ちや可なくす、

洋服和服何方でもよくて早く行つ

てもいつしやつてもいつしやつても

「促がすのも促がす結局一つ抜裏寒

あるも前以て知らぬ佛である。

（十）

今時の若者、動産的不動産を持つ資産家を蝸牛と言ふ

の。

そうして身の動作も鈍いも

のの。

おつとまあ出しぬけに廣吉と

言ひ捨て身を閃かして、

「在社」その性格と

聞き紀し、廣吉主に新道の南部の

で會見する。

條件藤倉冬郎さ

一時の人そこで偽名と

考へる。

炎野あつふ。

ほくふとも同じやうな代の軌道

狂的動作で走り居る。之れ[illegible]
廣告主の下駄新道の南部屋でとなり
會見する。[illegible]
[illegible]人であると知つてゐる。
[illegible]知慧の有る。
[illegible]
[illegible]
[illegible]

聞くこと為ること、宜しく前に言ひて置く。

「あゝ、なるほど、酷し

[illegible]分でお神さに引取て、

そんなら一時幾

[illegible]

[illegible]

旦那話

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一人決知し

[illegible]

[illegible]論

[illegible]

[illegible]

「アヤ無代でせう」

「無代」

何言ふのよ、そんな

何か錢を出して訳が無い。」

「錢出さん御覽なさい。」

求めたって

訳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

聞」。

そこで子細と説明。

「とゝ様、廣告見て、今日屹度尋ねて来るこの、二人来た。それと、有訳の者、四五人来たらしい。今晩、呼び付けての見合ひ。」

徒利口な為す事。

違ふ。

「呼び付けての見合ひ。」

旦那。

徒身装、今日の珍しい借着見

思ひ

「とゝ様、来た。」

「見合ひ。」

旦那は偉い方。

「斯申せば直ぐ

「とゝ様、」

「とゝ様、」

知る事。聞のうけわれ黙

「聞こえる。」

「聞こえる。」

わたくしの偉い人ぶるのを知らない。私が考へて、格別偉くもないのに、

「正直過ぎても困るなあ。其所へ偉くされて言ふ筈は聞かれない。」

財産は何位あるか。

「一寸とは言へないが、可いし承知した。その望みを聞いてやらう。」

地面の一箇所で、其代りは新橋延町の箱庭。

「ア、始から何の持ちものだ？

御勘定の値打ちは、毎月、毎年、

「地面は持ち者、道楽息子見る不信用の出来るもの。

「いつぱい貰ふよりは胡散臭い金でいつぱい持つこと。

のは信用のもの。

「勘定の値打ちは

「編ビ

と思ひつのるとして

「箱……何の言ひ方だね。あ、

聞くの私始めて。

何の

[illegible]

「此辺の見て[illegible]と揺[illegible]て、[illegible]て[illegible]、[illegible]の[illegible]で、[illegible]の[illegible]て、[illegible]物の映[illegible]て、[illegible]の[illegible]の[illegible]の

建ての先の方の庭の為に、サキ
ばかり。箱サキ町が箱こっぱ。
「ちっとも知らぬ」
「いいのかしら？」
「可ようござる。」
闇く置いて、物屋の言葉で言って、一寸と一
坪と言い。奥流儀で言って、アタ
ま奥行、敵、正味はいっぱい。」
「可。」

低地

「ぜっぱ物無しぶの土持って地揚
ったる。土は鮑っ貝で二十杯もいれて……」
「鮑っ貝の一名。」
泥車の一名。屋根の無しる、蓋無
「ぜっぱ、鮑っ貝。」
其鮑っ貝車でこねて、の〜〜〜
厚く土をみ盛る。為ーーーね。
ぜっぱ持ち。様子心得て、窃
ぜっぱ置

御收入は何程と得て置くべし。

取代は時々取るべし。次の取高は言うて置くべし。

十二月

昇つて感謝の眼で御覽。

涙含んで御覽。

十二月、

もう一度申上げて！

「ようしッ」と流石に返る。

「るもとこの生活。御覽。

「一日で一萬二千五百、一萬二千五百。

「細工賃で身體で……

「箱庭町の出來。

「持ち運びの出來。

「地面……」

「何？」

「持ち運び……」

「……」

文明開化の言葉は、さて、
文明的の言葉、今の開化、便利の
せの新式に由りてのせの進んで
ひとりでに、昔持てるものも
澤無持。起重機で軍艦とてく吊
つたるもの。何の噸とかいとドル一
つもの。
角庭町の御屋敷、そん
で、ちらでいはれん。
所く格子戸の鈴の音。

蹌踉て行つて、床柱のわきの節の凸凹の
横鬢を直。否、
居のもの。
と、口の座敷で昇と生てはみる
——備！その神とその來
濟、その應酬の文句宜
、其の客の足の音、廊下の音。
神の酒の足の部屋へ來。
主義調和で、此方
居主味、

蒲團の上に腰を
掛け、跳ね人形の彈機の是を
構へる。

「ぐつ！」

「殺」

比較の無い只此一
聲、鼻雄は鐵砲玉食らはせる。
虚空摑で只反
のけぞる。

「何と！
かつのは云つて限られぬ。」

てなる。

「あゝ、こ
ア、貴女、何そのさんし仰ぐ。
貴女は？　貴女、さア、ずつと、
いきは弱と打つ下げた。右見て、
尼見て、是彈機の跳ね
ずの態度を奮。
「あつ、そは嗚呼大変！」　漸
に身は聲震る。聲の身震て聲〻相應
ず、恐ろしいる。身震
尼急存亡の場合　身聲

同一歩調を取って。

「待て！」

聲の早い、あつかましい。聲高鼻雄

追蒐して、袂抑へ頂戴

早いのは上口近行く。

「待」

呼吸切って、

最駄目

て座敷通

其様に跪く。袂切り

身躍が

「御免」

足ぶん。私決て

「可いよ、其様に、所で怒鳴

見られる。

「思ひ所は思ひ掘の

時間。

「宅」這つて

赤の他人、座敷

「こんな軒に出来て。足ずまし

こつちもつて、何赤の他人に成て奥

「知らない。」

「[illegible]」

「[illegible]」

奥座敷

「[illegible]」と、[illegible]成[illegible]奇妙な間柄[illegible]。

[illegible]。[illegible]新しい居[illegible]。

[illegible]は[illegible]

赤の[illegible]。

妹[illegible]私[illegible]見合[illegible]

其見合[illegible]

[illegible]訳[illegible]

[illegible]兎角[illegible]奥[illegible]

様[illegible]分[illegible]様

で、[illegible]時は[illegible]手[illegible]出[illegible]

[illegible]。[illegible]

目鼻は強い。[illegible]

「[illegible]

[illegible]。[illegible]

[illegible]

[illegible]

傾

「……」と、家内は呼吸をのんで
居る。

横

駒形

「……」

「……」

「……」

[illegible]私[illegible]極[illegible]。

[illegible]嘶[illegible]分[illegible]可[illegible]。恐[illegible]

[illegible]様[illegible]主[illegible]家[illegible]帰[illegible]。

[illegible]神[illegible]。世話[illegible]。

私[illegible]是[illegible]暇[illegible]。

私[illegible]取[illegible]

[illegible]来[illegible]吳[illegible]。

恐悦[illegible]。奥[illegible]来[illegible]絵[illegible]無[illegible]。

吳[illegible]。何[illegible]。

今[illegible]主[illegible]。

[illegible]美[illegible]人[illegible]来[illegible]。

[illegible]帰[illegible]。

[illegible]早[illegible]帰[illegible]。

[illegible]。

[illegible]。

誰らの女である。中婦子の障子を透して見
る、紫繻子の奇麗な帶。「御免下さい」と
いふ優しい聲。いやゆる備はる又慌てて。障子
を開けて跳ね出て、取次ぐ。急い横合から開き
戸を開けて、
私は廣告から見て参りました原子さま
方でせうか淺醬脂。こんにちは。
「はい」
「あゝ」
「あゝ」
絶叫
「まあ！」
たゞ、ぼうぜんとして
来た。

「ぼうぜんとして来た」と學士は悶
嗟の叫び出す。
「何」と神顛ちず
「挿まって、「妹徒」と、「ひ妹
存知方」
「ひとし」と寧靖の、「あの山のあの
辺でぼうぐいす」
「まあ、かうしてぼうぐいす！」
かうしてぼうぐいす、

日和下駄に坐って、駒形の茶屋に坐って、大きな[illegible]。

[illegible]の知る。[illegible]、[illegible]変、[illegible]、此所[illegible]悪[illegible]行[illegible]。

「[illegible]」と聲潜めて、[illegible]。

「弾[illegible]、[illegible]、[illegible]、

この仕方。　吟徳　何黄母

仕方の無し。　紋附　何　下駄の無

貧乏　緒の臺所下駄も時節です。いい

黄母　いい、原さん？　仰

原　いい、ちっとも、はい、

待　下駄いやや、今

何　今　すぐ　鬼龍

食し止　ち通

一人で五銭　下足　轉　同

眉　一緒！

為　妹徒

身　忘　待

貴母　駄持

鬼角良　智慧　後

渇　緒　儘　呼吸　無銭

ある。

神の如く轉　戻　格戸

る。無惨にも感じた。

「分かったよ。あの方私知らない。私よく遊ぶ。何でもあの方れ怨言言って頂戴、本当にね。子もちゃんとすると。」

「あゝ、まあ！」

神は左に吊る。

向こうの家の飛び出した。

「かつよ帰る。」

さっぱりとした、いへこちらこしの。

「よア！」

切駒回るんぶ。

「」

それを家外で見ては二に

ばかりこと。

食はる。

呆れて身動を為て

朝は外へ出て手を取り、引張へる。

るのを、扱ひ捉まえ。石のように硬く

かつぐ。

みたい列。

駒形鼻緒駒形の鼻緒

ほ。

編み物の魚。

そのこと編みの三つの言。

座蒲団に響き、

ぜんぶ様は是。

呼吸の有る。本魚。

埋

（十二）

花の修羅場と

事は渾ぐて相絡む。花園と云ふ

つまるところ、駄目の縮み

最陰陽無

見

虚の虚

論理窟の

附け焼き無い

只何れの何れの同一の

性的欲情

掛け違ひ

欺

含つて、中流の渦

巻

終に何所の其渦

巻

工合

五

材木の何

らば、かちつ、そんな言の美の響伝出

知

らつの、材木の漸

言葉

るそこらの沙汰でも無く、一向に為榮

勿論跳ね返

士の接著

吸ら著

結句却て

同

斯

合

三新聞廣告

美人知

仕舞

美人

兩美人

兩美人

で、ふい寧外

閑

[illegible]言つて、是は行あつて
[illegible]名義で藤倉太郎と云へば、力會見が
不結果で落第と云へば、直その外
[illegible]曉に金剛之郎に襲撃する腹
[illegible]で、[illegible]言つて、是は原
[illegible]名義で淺醤脇と云へば、落第
曉は、[illegible]同様に、[illegible]
[illegible]取[illegible]計畫[illegible]言つ

[illegible]影武者[illegible]種明
[illegible]ふ。「[illegible]」「すゝ！」「ゆア、不
[illegible]」「[illegible]！」
何の不好
[illegible]は總て暴露る迄の知
猫である。否、包み隠さず女の大多
猫で、包み隠さず飾つて居れる間だけの
[illegible]猫[illegible]飾[illegible]取[illegible]
のドう猫[illegible]猫である。否、ドう猫でもない

れば、體の好いから惚れて了度立合ひの悪くて二度目の相手の見附けられの年の老いてゐる者も或らは負惜しの「寡婦」と立身する。

怪しいと足りて故、わるのなるよの

兩美間に妥協の遂に成ること

妥協は何の妥協の為に。

互に、相談づく

問答は其所に随分色々と押

結局いつて不始末

極つて見合ひの縁つづき、萬事と取

極めのつかぬ内に好いの、嬉しいわ、萬歳ーと、斯落着とふつて来た。

「そこで、みんな縁切出。」

「そこで、とつのの相談つて好。」

「同居生活で友達の頭よ。」

「中脱でゆ探の為も、運命つよ。」

「それでみち習つて、見合ひ、そこで差当り御お為んな

全く、縁づくのだわ。相談ず
の宜しいわ。運命づくのだ。
つくづくしの縮めて、月の圓くロを開
官のかの人妻の本苑である。月の書閣
は蛙殺して目を瞑して、裏の闇
い忽光眼である。
調停の仲裁の蝶
好し役回る。氷人。
静かに産んだ場。四海波ぶ
静かに出て、遂に流れる。

縁組みの取決める。
いろいろ婚禮である。婚禮の
愛の事を仰々書きそえるのは、篇中
のいうのゆえんである。
理である。即ち、濟して是
ようにいろ一くを略して
家庭である。
外見の花園に花園士を取って修羅
場である。風無くして無
なく倚りである。
すると倚りうらん

板は仕方無く旦撓て、暫らくは息を殺して機を待つてゐる。やがて、やつてゐる頭擡たてを伸ばして均しの如く扱き呉れた。二のはまで意地しかる。而して降り得る畏し、疾の粒は何時迄も覺り合ふ。

ほゝよう論嬢である。しかし、つまり身はいつまでも仙人の如しである。

ではお徹底。白粉の青磁の徹生様の様に持てる。そこで折て考へる。自らは幸しかしこれは幸しかしお早い出生である。揺て見られるこの派手なる。それに陽春の如くれ——雅様の蟲物菓子青竹の水

つて、派手なのは出。處女の払ひそて考へる。

れば料理屋の方で買けて居る。

「おつるさん、美くしい是でしょ」と、ぱっと箱を出して掛ける。

持参の手箱から、

「きっと行りの見せ、と、勿論口の

ゆるつるは「ずるい」

「おつるさん、ちっとも貴女……」

聞きかねて、

「かつるのね」

んとて澤山貴女ちゃんて無駄に

と！

不経済な口ぶり。

しっかり、室蘭行きの

「ねえ？」と、手提箱に見のがすまい！　怒

ひっぱりだす積りでは、

「つるさん、ちょっとさ」

「ねえってば？」と座敷起る。

お箱を差しつけて、「これ、こんちゃるみ

「ねえ」

「針ぬちゃ。」

「虚惚けて、「結構ね

「ほ、ほ、ほ、

御覽なさい。

蓋を開けて差附ける。

筋がねの、此様なものを。

畜生の、十個持つてゐる。

つ、ぬけて見える色彩

つ、ぬけて、澤山有るこゝろ。」

つ、ぬけ。

つ、ぬけ。」

あゝ、おゝ！」

開戰の序開

開けて、さア夫

先此辺で、砲火斯て度

家内と言つてゐるのは暗雷

その漲暗雲

蒸

狗全

開

てゐる。

ぬ。

ぬのは

ぬ

湯の飲

胡椒の

言葉

ほてり

熱氣

毎

兩美人

最

此三年過

吳

襟を取つて

仕儀

驚

兩美人

無
禮讓互頭篤
針刺容
所玉貞
下女窓
全
碎意氣組
投
權略
一歩挿
鼻雄

表面はそれで、
篤い其裏面
寄る月の
近頃僅
女學生頼
玉ちゃん
下女男
中
兩美
一歩挿んで
暗

燭
昏二箇の間の
好
暗く蒸して
窓の迫
兩美
宮
不圓
端無
銘々秘密箱を捜
見
個々作成
記録
兩美
帝
巻發見
秘密の幕開
怖
双方
其所
其日
讀
對照

-8½

[illegible]

[illegible]

[illegible]